

研究タイトル：『萬葉集』における「伝説歌」形成の研究



氏名：	安井 絢子 / Ayako Yasui	E-mail：	yasui@ariake-nct.ac.jp
職名：	助教	学位：	博士(文学)
所属学会・協会：	萬葉学会, 萬葉語学文学研究会, 美夫君志会, 上代文学会		
キーワード：	萬葉集, 伝説歌, 日本上代文学, 和歌,		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> ・『萬葉集』における「伝説歌」に関すること ・上代文学に関すること 		

研究内容：『萬葉集』における「伝説歌」形成の研究

『萬葉集』中には昭和初期以降、「伝説歌」とも把握されるようになった歌がある(注1)。代表的な作品として次の歌が挙げられる。

- ① 「葛飾の真間の娘が墓に過る時に作る歌」(巻3・431～433 山部赤人 挽歌)
- ② 「上総の末の珠名娘子を詠む歌」(巻9・1738～1739 高橋虫麻呂 雑歌)
- ③ 「水江の浦島子を詠む歌」(巻9・1740～1741 高橋虫麻呂 雑歌)
- ④ 「葛飾の真間の娘子を詠む歌」(巻9・1807～1808 高橋虫麻呂 挽歌)
- ⑤ 「菟原処女が墓を見る歌」(巻9・1809～1811 高橋虫麻呂 挽歌)
- ⑥ 「葦屋の処女が墓に過る時に作る歌」(巻9・1801～1803 田辺福麻呂 挽歌)
- ⑦ 「処女墓の歌に追同する一首」(巻19・4211～4212 大伴家持)

『萬葉集』の歌は、主に雑歌(儀礼的な歌)・相聞(恋を中心に互いに思いを伝え合う歌)・挽歌(広く死に関わる歌)に分類されている。上記「伝説歌」の多くは、挽歌部や雑歌部に載せられており、『萬葉集』編纂当時には挽歌や雑歌として把握された歌であると考えられる。それが現在「伝説歌」とも把握されているということは、これらの歌が挽歌や雑歌でありながら「伝説歌」としても括られ得る質を有することを示唆する。上記にあげた個々の歌の表現を詳細に分析することで、「伝説歌」とも把握される歌の形成過程、及びその後の展開の様相を明らかにし、「伝説歌」の本質を明らかにすることを研究目的としている。

これまでに『萬葉集』の挽歌部を中心に、「伝説歌」の形成過程の分析を行ってきた。代表的な「伝説歌」の中で最も成立が早いと推測されるのは挽歌部の①であること、及び、「伝説歌」の多くは挽歌部に載り、いずれも女性を対象としていることに着目すると、女性を対象とする挽歌から「伝説歌」が形成された可能性が考えられるからである。

挽歌部に載る多くの歌は、作歌者にとって何らかの直接的な関係性を有する死者を対象とし、死を受け止め、悲嘆し、悼む内容を持つ抒情的な歌である。一方、「伝説歌」において詠まれる死者は、作歌者にとって、過去に亡くなった第三者の女性にすぎない。多くの挽歌とはその対象を異にする「伝説歌」は、どのように形成されたのか。他の多くの挽歌と表現を比較・分析しながら、挽歌としての位置づけを明らかにしてゆくことで、同時代の第三者の女性を対象とした挽歌から、過去に亡くなった第三者の女性を対象とした「伝説歌」が形成されていった過程が顕かになってきている。今後、雑歌部における「伝説歌」の展開の様相を明らかにし、「伝説歌」の本質についての考察を深めていく予定である。

(注1) 「伝説歌」という術語の見える早い例は、川村悦磨氏『萬葉集傳説歌考』(甲子社書房、昭和2年11月)である。

【 主要論文 】

「過-勝鹿真間娘子墓-時山部宿祢赤人作歌」考 『萬葉』(227)40-55頁 2019年3月

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	